

## 王昭君説話の語り方

田村, 隆  
東京大学 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/4773215>

---

出版情報 : 語文研究. 130/131, pp.102-118, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :



# 王昭君説話の語り方

田 村 隆

一

熊本城本丸御殿の大広間「昭君之間」は二〇〇八年に推定復元された。漢の元帝の時代、匈奴に嫁いで行った王昭君を壁や襖に描いた豪華な部屋である。馬上で琵琶を弾く王昭君の姿は、『和漢朗詠集』の版本の挿絵にも描かれた。

王昭君を絵に描くことは早く『源氏物語』総合巻に例が見られる。

殿に古きも新しきも絵ども入りたる御厨子ども開かせ給ひて、女君ともろともに、いまめかしきはそれく〜と選<sup>え</sup>りと、のへさせ給ふ。長恨歌、王昭君などやうなる絵は、

おもしろくあはれなれど、ことの忌あるはこたみはたてまつらじと選りとゞめ給<sup>ま</sup>ふ。

王昭君を描いた絵は「ことの忌ある」ものとして総合での披露が見送られた。「王昭君」もしくは「昭君」の語は、他に『うつほ物語』、『和漢朗詠集』、『浜松中納言物語』、『大鏡』、『住吉物語』にも見られる。日本文学における王昭君の受容については、川口久雄「敦煌変文の素材と日本文学——王昭君変文と我が国における王昭君説話<sup>(注2)</sup>」をはじめ、すでに多くの論考が備わり、上原作和「光源氏物語の思想的変貌——〈琴〉のゆくへ」には王昭君について記した資料が伝承の話型ごとに分類されている<sup>(注3)</sup>。本稿で掲げる作品の多くもこれまでに検討を重ねられてきたものだが、私達が抱く王昭君像を糸

口に、改めて受容史をたどってみたい。

王昭君説話は高等学校の漢文の教科書で扱われることも多いが、その教材として用いられるのは、専ら『西京雜記』(晋丹陽葛洪集、明新安程榮校)である。『日本国見在書目録』(寛平三(八九二)年頃成立、藤原佐世撰)に「西京雜記二卷」とあり、日本にも早くに入っていることがわかる。

元禄三(一六九〇)年刊の和刻本六卷の本文を書き下して掲げる。

元帝の後宮既に多くして、常には見ゆることを得ず。乃ち画工をして形を図せしめ、図を案じて、之を召幸す。諸宮人皆画工に賂ふ。多き者は十万、少き者も亦五万を減ぜず。独り王嬙のみ肯ぜず。遂に見ゆることを得ず。匈奴入朝す。美人を求めて閼氏と為す。是に於いて上図を案じ、昭君を以て行かしむ。去るに及びて召見するに、貌後宮第一たり。応対を善くし、举止閑雅なり。帝之を悔ゆるも、名籍已に定まる。帝信を外国に重んず。故に復た人を更へず。乃ち其の事を窮案し、画工皆棄市せらる。其の家資を籍するに、皆巨万なり。画工に杜陵の毛延寿有りて、人の形を為るに、醜好老少も、必ず其の真を得。安陵の陳敞、新豊の劉白、龔寛、並びに牛馬飛鳥

を為るに工なるも、亦人の形の好醜を肖らせては、延寿に逮ばず。下杜の陽望も亦画を善くし、尤も色を布くを善くす。樊育も亦色を布くを善くす。日と同じくして棄市せらる。京師の画工は是に於いて殆ど稀となれり。

(卷二)

西京雜記卷第二

晋 丹陽葛洪集  
明 新安程榮校

元帝後宮既多。不得常見。乃使畫工圖形。案圖召幸之。諸宮人皆賂畫工。多者十萬。少者亦不減五萬。獨王嬙不肯。遂不得見。匈奴入朝。求美入爲閼氏。於是上案圖。以昭君行。及去。召見貌。後宮第一。善應對。舉止閑雅。帝悔之。而名籍已定。帝重信於外國。故不復更入。乃窮案其事。

『西京雜記』元禄3年刊(架藏)

教科書では画工について記した末尾部分は省かれ、「画工皆棄市せらる」と、もしくは「其の家資を籍するに、皆巨万なり」までが掲載される。

この『西京雜記』の一節を読んで、王昭君だけが賂賂を贈らなかつた理由を話し合う課題が示される教科書もある。

本文には明示されていないために、課題に対してはさまざまな答え方があると思われるが、その一つとして、「王昭君は誠実な人であり、不正な手段で美しく描いてもらうことはできないと考えたから」など、道徳的立場からの理由がまずは思い浮かぶのではなからうか。そういった解釈に立つ啓蒙書として、たとえば高須芳次郎『東西名婦の面影 金言対照』（明治四十四年、博文館）には、「絶世の佳人、君命に従うて匈奴の酋長に嫁す（漢の王昭君）」という章がある。

処とらが昭君は、極めて正直な精神こゝろを持つて居たので、従来これま行はれた賄賂に就ては、余り快く思はなかつたと見えて、  
画工あかきへ一文をも与へなかつたので（注）す。

しかし、『西京雜記』に関して言えば、「極めて正直な精神」にあたる記述はなく、それはあくまでも読者が『西京雜記』というテキストを読んで抱く王昭君像である。たとえば『今昔物語集』卷十一「漢前帝后王昭君、行胡国語第五（注）」に紹介される王昭君説話から受ける王昭君の印象は異なる。すでに諸

書に指摘されていることだが、課題の点を含め、相違する箇所を以下に掲げる。

まず、宮中の女性達の絵を描く目的が異なる。『西京雜記』には「画工をして形を図せしめ、図を案じて、之を召幸す」とあり、絵は元帝の「召幸」のためであったものが後に匈奴の妻選びに転用されたのに対し、『今昔物語集』では「此ノ宮ノ内ニ徒ニ多ク有ル女ノ、形チ劣ナラムヲ一人、彼ノ胡国ノ者ニ可給キ也」とあるように当初から「胡国」へ行く女性を選ぶために描かれた。

各我モ我モト絵師ニ、或ハ金銀ヲ与へ、或ハ余ノ諸ノ財ヲ施シケレバ、絵師、其レニ耽テ、弊つたなキ形ヲモ吉ク書成シテ持参タリケレバ、其ノ中ニ王昭君ト云フ女人有リ。  
形チ美麗ナル事、余ノ女ニ勝タリケレバ、王昭君ハ、我が形ノ美ナルヲ憑たのみテ、絵師ニ財ヲ不与ザリケレバ、本ノ形ノ如クニモ不書ズシテ、糸いとト賤いじけ氣ニ書テ持参リケレバ、「此ノ人ヲ可給ベシ」ト被定ニケリ。

女人達が我も我もと賄賂を贈る点は共通しているが、その目的が帝寵を受けるためか、胡国に遣られないためかの違いがある。同じ結末になるとはいえ、『西京雜記』では絵を描く

時点でもまだ胡国の話は持ち上がっていない。「金銀」や「余ノ諸ノ財」の功あつて、皆が「吉ク書成シテ」もらう中で、王昭君（文中の表記は「王昭君」）一人は賄賂を贈らなかつた。

この点も『西京雜記』と共通するが、先に紹介した課題に関する箇所で、『今昔物語集』では王昭君の対応を「我が形ノ美ナルヲ憑テ絵師ニ財ヲ不与ザリケレバ」としており、「財」を与えなかつた直接の理由を「我が形ノ美ナルヲ憑テ」と明記しているのである。

先にも述べたように、賄賂の不正に対する王昭君の認識自体は『西京雜記』の本文には示されておらず、「独り王嬙のみ肯ぜず」や「応対を善くし、挙止閑雅なり」といった表現、あるいは賄賂を受け取つた画工達が「棄市」（処刑）されたという記事から、読者が正義感の強い王昭君像を推測しているに過ぎない。それにせよ、王昭君の対応に関して画書の印象は異なる。加えて、『今昔物語集』は話の末尾に「此レ、形ヲ憑テ絵師ニ財ヲ不与ザルガ故也トゾ、其ノ時ノ人謗ケルトナム語り伝ヘタルトヤ」という評を付し、絵師に財を与えなかつたことが王昭君の過失として人々の非難の対象になっている。賄賂行為の善悪が棚上げされた評と言えよう。

『今昔物語集』の特徴としてもう一つ挙げられるのは、王昭君が胡国へ渡つた後のことである。『西京雜記』は後日談とし

て、賄賂を受け取り処刑された画工毛延寿達について述べるのに対して、『今昔物語集』の関心はそこにはない。

遂ニ王昭君ヲ胡国ノ者ニ給テケレバ、王昭君ヲ馬ニ乗セテ胡国ヘ將行ニケリ。王昭君、泣キ悲ムト云ヘドモ、更ニ甲斐無カリケリ。亦、天皇モ王昭君ヲ恋ヒ悲ビ給テ、思ヒノ余リニ、彼王昭君ガ居タリケル所ニ行テ見給ケレバ、春ハ柳、風ニ靡キ、鶯徒（つれづれ）ニ鳴キ、秋ハ木ノ葉、庭ニ積リテ、檐ノ隙無クテ物哀ナル事、云ハム方無カリケレバ、弥（いよいよ）ヨ恋ヒ悲ビ給ケリ。

画工達の話題に代えて、王昭君を胡国に遣つた後の、天皇の「恋ヒ悲ビ」について記す。画工達の後日談よりも、残された天皇が春の柳、秋の木の葉に「物哀」を感じ、王昭君のことを一層恋しく思う様子の記述が優先されている。このような、残された者について記す姿勢は後に挙げる『俊頼髓脳』にも見られ、川口氏は、「これは元帝が昭君の去つたあとにしのお愁嘆場面です。で中世説経節的な哀調による日本的詠嘆の色彩が濃く、楊貴妃をしのぶ玄宗皇帝のなげきを唐物語が唱導的美文でかたる哀調と共通する」と指摘する。

ここで「日本の詠嘆の色彩」と称される語り方については、すでに『源氏物語』にも見られる。『源氏物語』には『今昔物語集』のように王昭君説話そのものを詳しく語る箇所はないが、須磨巻に、源氏が京にいる紫上のことを案じつつ、王昭君と元帝に思いを馳せる場面がある。

冬になりて雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにごくながめ給ひて、琴を弾きすさび給ひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊び給ふ。心とめてあはれなる手など弾きたまへるに、異ものの声どもはやめて、涙をのこひあへり。むかし胡の国に遣はしけむ女をおぼしやりて、ましていかなりけん、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、「霜の後の夢」と誦し給ふ。

源氏が口ずさんだ「霜の後の夢」は、『和漢朗詠集』巻下の「王昭君」の部立に載る大江朝綱（八八六〜九五八）の詩句で

ある。

胡角一声霜の後の夢　漢宮万里月の前の腸ものおもひ  
昭君若し黄金の賂まひなを贈らば　定めて是れ身を終ふる  
まで帝王に奉ぜんせむ

源氏は紫上と離れて過ごす日々から、「むかし胡の国に遣はしけむ女」、すなわち王昭君のことを思う。ただし、その感慨は「この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむこと」と記されており、王昭君を遠い胡国に遣る羽目になった元帝に同情している。それは先に見た『今昔物語集』における帝の嘆きと通じるものである。

また、『西京雜記』などによれば、元帝は王昭君との別れに際して初めてその美しさを知ったという。偽りの絵を信じた後悔はあるにせよ、源氏にとつての「わが思ひきこゆる人」である紫上と重ね合わせるのはいささか不自然はないか。原拠は特定できないが、『経国集』巻十四所収の小野末嗣の詩句「一朝寵を辞す長沙の陌　万里愁へて聞く行路の難むづか」に詠まれるような、元帝が王昭君を鍾愛していたとする異伝によるのであろう。

『源氏物語』における王昭君説話関連の場面は宿木巻にもう

一例ある。そこでは亡き大君の<sup>ひとがた</sup>人形を作り絵にも描いて供養したいと話す薫に対し、中君は絵について「黄金<sup>こがね</sup>求むる絵師もこそなど、うしろめたくぞ侍るや」と語り、賄賂の黄金を求めぬ絵師がいては困ると返答する。『源氏物語』が依拠した王昭君説話にも絵と賄賂の要素は含まれていたことが確認される。

元帝が王昭君を寵愛したとする異伝の存在は、先行する『うつほ物語』の内侍督卷からもうかがえる。上原氏が詳細に分析しているように、『うつほ物語』における王昭君説話の受容はその他にも異色の内容を含む。

胡の婦<sup>めこ</sup>たちを、「むかし唐土の帝の戦に負けたまひぬべかりける時、胡の国の人ありて、その戦を静めたりける時、天皇喜びのきはまりなきによりて、「七の后の中に願ひ申さむを」と仰せられて、七人の后を絵に描かせたまひて、胡の国の人を選ばせたまひける中に、すぐれたるかたちありける。そのうちに、天皇思ふこと盛りなりければ、その身の愛を頼みて、ここの<sup>こくも</sup>国母、夫人<sup>かみん</sup>の中に、われ一人こそはすぐれたる徳あれ、さりとわれを武士に賜ばむやはの頼みに、かたち描き並ぶる絵師に、六人の国母は千両の黄金を贈る。すぐれたる国母はおのが徳の

あるを頼みて贈らざりければ、劣れる六人はいとよく描き落として、すぐれたる一人をばいよいよ描きまして、かの胡の国の武士に見するに、「この一人の国母を」と申す時に、天子は言變へず、といふものなれば、え否びず、この一人の国母を賜ふ時に、……

七人の后が登場する点も珍しいが、傍線部に「天皇思ふこと盛りなりければ、その身の愛を頼みて」とあるように、後に胡国に赴くこととなる国母は、天皇の寵愛を受けていたことが語られる。『源氏物語』の例と考え合わせれば、王昭君について当時そのような理解があったことは確かだろう。また、問題の絵に関して、通常の王昭君説話では一人醜く描かれた王昭君が匈奴の妻に選ばれるのに対し、この物語では七人の后のうち「劣れる六人はいとよく描き落として、すぐれたる一人をばいよいよ描きまして」、最もよく描かれた国母が選ばれるのである。寵愛を受けていたはずの国母が胡国に遣られるのは本来辻褄が合わない（記述が断片的なので気づきにくい）が、この問題は実は『源氏物語』の王昭君受容にも言えることである。それで、絵を見て選ぶのは帝側から「胡の国の武士」に変更され、それに伴って、醜い女性を遣わすという帝の思惑（たとえば『今昔物語集』では「其レヲ見テ、劣ナ

ラムヲ胡国ノ者ニ与ヘム」も、最も美しい女性を選ぶ話へと改めざるを得なかつたのではなからうか。

また、『うつほ物語』では残される者よりも胡国に赴く国母自身のこと記されている点も、『源氏物語』や『今昔物語集』とは異なる。「胡笳の音」への言及からは、音楽の物語たる『うつほ物語』らしさもうかがえる。

国母胡の国へ渡るとて嘆くこと、胡笳こかの音を聞き悲しびて、乗れる馬の嘆くなむ、胡の婦が出で立ちなりける。それを聞くに、獸けだものの声にあらじかし。それを遊ばしつる御手、二つなし。あらはとも思ほえたつれ」とのたまふほどに、八の拍に遊ばし至る。それ、かのなん風のいへの族ぞうなりけり。

そして、国母が賄賂を贈らなかつた理由については、「おのが徳のあるを頼みて贈らざりければ」とある。この「徳」は天皇の寵愛を得ていることを指すのであろうから、「我方形ノ美ナルヲ憑テ」と表現は異なつて見えるが、「おのが徳」とあり、自らを「恃む」点において共通することを確認しておきたい。

この「寵愛」と「徳」の二点に関して、後の例だが謡曲の

「昭君」には、

ワキ「……帝に召されて御寵愛限りなかりしに、さる子細あつて胡国の夷に移されて候。

地謡「……似せ絵にこれをあらはし、中に劣れる様あらば、すなはちかれを選びて、胡王のために遣はし、天下の運を鎮めんと、綸言あらせ給へば、……」

地謡「……中にも昭君は、並ぶ方なき美人にて、帝の覚えたりしなり。それを頼める故やらん、ただうちとけてありしに、画図に写せる面影の、あまり賤しく見えしかば、さこそは寵愛、はなはだしとは申せども、……」(注10)

とあり、美しさゆえに帝に寵愛され、それを頼みにして賄賂を贈らなかつたために賤しく描かれたことが語られる。『源氏物語』や『うつほ物語』の王昭君理解を受け継ぐものと言えよう。ここにも先に指摘した矛盾はあるのだが、絵を選ぶ過程には帝は関わつておらず、「君子に私の、言葉なしとやおほしけん」と諦めて決定を覆すことはなかつたとする。

#### 四

自らの美しさ、および徳を恃む王昭君の姿を見てきたが、ここで『西京雜記』に立ち戻りたい。「漢魏叢書」所収の『西京雜記』は冒頭に掲げた和刻本と同文だが、盧文弨校刊「抱經堂叢書」を底本とする『詛注西京雜記・獨斷』(注1)を確認すると、王昭君が賄賂を贈らなかつたことを記す箇所の本文は、「獨り王嬙のみ自ら容貌を恃み、与うるを肯んぜざれば（獨王嬙自恃容貌、不肯與）」である。和刻本や教科書の「獨王嬙不肯」と比べると、「自恃容貌」の四字が加わっていることがわかる。

この注釈書が底本とする劉歆撰『抱經堂叢書 西京雜記』（原刻景印 百部叢書集成）によるの本文はたしかに「獨王嬙自恃容貌不肯與」であり、注記に「旧本作王嬙不肯遂不得見今從樂府解題増正」とあつて、先に挙げた通行本文との異同に言及する。

今日、『西京雜記』を読むときは、大方において「獨王嬙不肯」とあるテキストを読んでいるのではないか。しかし、同じ『西京雜記』でも、もし「自恃容貌」の四字を備えたテキストに即して先の教科書の課題に臨むなら、自ずと答え方も

異なってくるのではなからうか。読者の王昭君像に変化をもたらず一句と言える。

そして、この「自ら容貌を恃む」もう一つの王昭君像こそ、これまでに見た王昭君説話に通じるものである。『今昔物語集』の表現は「我が形ノ美ナルヲ憑テ」であつたことを思い起こしたい。これは『西京雜記』の「自ら容貌を恃んで」と対応する表現と言えよう。

先の注記に「今從樂府解題増正」とある点について、唐の吳兢(ごきやう)（六七〇―七四九）撰の『樂府古題要解』には「一説」として、全くの同文ではないものの『西京雜記』の内容が引かれる。享保十七（一七三二）年刊本により訓読する。「津逮秘書」と「学津討源」の本文も併せて確認した。

右旧史、王嬙字は昭君、漢元帝の時、匈奴入朝す。詔して嬙を以て之に配す。胡閼氏と号す。一説に漢元帝の後宮既に多くして、常には見ることを得ず。乃ち画工をして其形を図せしめ、図を案じて、召幸す。宮人皆画工に賂ふ。多き者は十万、少き者も亦五万に減ぜず。昭君自ら容貌を恃んで（自恃容貌）獨り與ふるを肯ぜず。工人乃ち醜く之を図す。遂に見ることを得ず。……

等十曲皆無其詞若關山月已下八曲  
 後代所加也  
 王昭君  
 右舊史王嬙字昭君漢元帝時匈奴入朝詔  
 以嬙配之號胡閼氏一說漢元帝後宮既多  
 不得常見乃使畫工圖其形案圖召幸宮人  
 皆賂畫工多者十萬少者亦不減五萬昭君  
 自恃容貌獨不肯與工人乃醜圖之遂不得

『樂府古題要解』享保17年刊（架藏）

そこには、「抱經堂叢書」と同様に「自恃容貌」の四字があることに注目したい。さらに、宋の郭茂倩編『樂府詩集』卷二十九に「王明君」（文帝司馬昭の諱に触れるため「明」に改められた文献も散見する）の解題として『唐書』樂志の次に『西京雜記』が引かれる。その本文にも「自恃容貌」の四字がある。

また、日本における『西京雜記』受容の例として、時代は下るが室町期の成立と見られる『漢故事和歌集』が知られ、肥前島原の松平文庫本（近世前期写）によれば、

宮人皆画工に賂ふ。多き者は十万、少き者も五方に減ぜ

ず。昭君自ら其の呉を恃んで（自恃其呉）独り与へず。

という『西京雜記』の引用がある（原漢文）。中世における『西京雜記』の本文が「自恃其呉」の四字を持つていた一例となる。

『西京雜記』以外の漢籍における王昭君説話もいくつか確認しておきたい。魏晉南朝の劉義慶編『世説新語』の王昭君（王明君）説話は以下の通りである。

漢の元帝、宮人既に多し。乃ち画工をして之を図かしめ、呼ぶ有らんと欲する者は、輒ち図を披いて之を召す。其の中の常なる者は、皆貨賂を行ふ。王明君姿容甚だ麗しく、志苟も求めず。工遂に毀ちて其の状を為す。後匈奴来り和し、美女を漢帝に求む。帝、明君を以て行に充つ。既に召見して之を惜しむ。但だ名字已に去り、中ごろ改めんことを欲せず。是に於いて遂に行る。

「王明君姿容甚だ麗しく、志苟も求めず」の箇所を、「新釈漢文大系」は「王明君は姿容がはなはだ美しかったので、そのようなことをしてまでも君寵を求めようとはしなかった」と訳す。ここでの賂賂の目的は『西京雜記』と同じく「君寵」

であって、匈奴の話が持ち上がる前のことである。「王明君姿容甚だ麗しく、志苟も求めず」は『西京雜記』と内容は類似するものの、『西京雜記』の「自ら容貌を恃みて」といった表現はない。

唐代の類書『類林』<sup>(注15)</sup>の敦煌本には、「昭君自ら端美を恃みて（昭君自恃端美）、画工に求めず」という一節があり、『類林』の改編本とされる『瑠玉集』には、

昭君自ら美麗なるを以て（昭君自以美麗）画師に求めず。

画師乃ち昭君を図して拙と為す。<sup>(注17)</sup>

とあって、「恃みて」は「以て」という形で語られている。王昭君説話の受容に際し、特定の漢籍一書の直接的な影響関係を明らかにすることは難しく、説話に限らず詩や史書なども含めた複合的な情報源が想定されるところではあるが、一つの手がかりとして、『今昔物語集』などに見られる自負の言葉はやはり「自ら容貌を恃みて」の一句との接触を思わせるのである。

## 五

次に、和歌を伴う王昭君説話の受容として、『俊頼髓脳』について述べる。源俊頼はまず懷円法師と赤染衛門の歌二首を掲げ、その解説として王昭君説話に触れる。

みるたびにかがみのかげのつらきかなからざりせばか  
からましやは

なげきこし道の露にもまさりけりなれにしさとをこふる  
涙は<sup>(注18)</sup>

歌に続き、「この歌、懷円と赤染とが、王昭君を詠める歌なり」から説話の紹介が始まる。唐土の帝の後宮には四五百人の女性が仕えているところに、「えびすのやうなるもの」からその内の一人を賜りたいとの申し出がある。そこで帝は、「みづから御覧じて、その人を、さだめさせ給ふべけれど、人々の多さに、思し召しわづらひて、絵師を召して、「この人々のかた、絵に画きうつして参れ」と命ず。絵に描く目的が当初から「えびすのやうなるもの」への対応である点は『今昔物語集』と通じ、時期としては『今昔物語集』に先立つ。た

だし、『俊頼髓腦』には「かの、えびすのやうなる物と申すは、胡の国のみかどの、「わが国にはよき女のなきに、容姿よからむ人賜はらむ」と申しけるとも、申しける文ありとぞ」ともあつて、この点は『うつほ物語』に見られた型と言へる。ただし、ここでは実際の選び方は「胡の国のみかど」の希望通りのものではなかつた。

以下はそれに続く場面である。

われもわれもと思つて、おのおの、こがねをとらせ、それならぬものをもとらせければ、いとしもなき容姿かたちをも、よく画きなして、持てきたりけるに、王昭君といふ人の、容姿のまことにすぐれて、めでたかりけるをたのみて、絵師に、物をも、心ざさずして、うちまかせて画かせければ、本もとのかたちのやうには画かで、いとあやしげに、画きて持て参りければ、この人を給ふべきにさだめられぬ。

王昭君が賄賂を贈らなかつたというこの場面は多くの王昭君説話に共通するところだが、今は特に傍線部の表現が、『今昔物語集』の「我が形ノ美ナルヲ憑テ」と通じること注意到したい。詩歌の注釈における王昭君説話としては、『和漢朗詠

抄注（永済注）』（鎌倉初期頃成立）も挙げられる。『和漢朗詠集』には「王昭君」の部立があることをすでに述べたが、その中に、

三千人、ワレモくト、サマくノタカラヲ、画工ニト  
ラセテ、カタチヲヨクカ、セケルニ、王昭君ハ、ワガ、  
タチヲタノミテ、ソノマヒナヒヲ、セザリケレハ、画工  
ココロエス思ヒテ、照君カ、タチヲ、ミニクキサマニ、  
カキテケリ。（注19）

という一節が見られる。「ワガ、タチヲタノミテ」もまた、これまで挙げた「恃む」事例の一つである。

『俊頼髓腦』の続きの場面だが、胡国へ行く王昭君を恋しく思う帝の描写は「残された者の物語」を思わせるが、「みかど、恋しさに、思し召しわづらひて、かの王昭君が居たりける所を、御覧じければ、春は柳、風になびき、うぐひす、つれづれにて、秋は、木の葉につもりて、軒のしのぶ、隙なくて、いとど、もの哀なる事かぎりなし」という箇所などは『今昔物語集』と酷似しており、影響関係も想像される。

この後によくやく歌への言及があるのだが、二首並ぶうち、問題になるのは一首目の懷円法師の歌である。「もの哀なる事

かぎりなし」に続けて、

この心を詠める歌なり。かからざりせばと詠めるは、わろからましかばたのまざらまし、と詠めるなり。

との注釈がある。

この歌は、『後拾遺和歌集』巻十七、雑三に以下のような並びで赤染衛門の歌とともに取められている。

王昭君をよめる

赤染衛門

なげきこし道の露にもまさりけりなれにし里を恋ふるな

みだは

僧都懷寿

思ひきや古きみやこをたちはなれこの国人にならむもの

とは

懷円法師

見るからに鏡の影のつらきかなか、らざりせばか、らま

しやは(注)

初句は「見るからに」となっており、『俊頼髓脳』とは異なるがある。

この歌の下句、「か、らざりせばか、らましやは」が何を意味するのかについてはさまざま見解が提出されている。俊

頼は「わろからましかばたのまざらまし」の意であるとする。

「わろからましかば」はもし自分の姿が醜かったならという仮定であり、「たのまざらまし」は、「容姿のまことにすぐれて、めでたかりけるをたのみて」の「恃む」である。岡崎真紀子氏は、『俊頼髓脳』の解釈でゆくと、鏡の前で美貌に自惚れている驕慢さ、王昭君の思い上りが、この歌から浮かび上がってくる(注)と述べる。また、『八代集抄』は「下句両説也。かく美色ならずば、かく絵に悪くか、れて、胡国にゆかんやと也。又胡国にて鏡をみて、かくこ、に來ざらましかば、かくおとろへましやはと也」と注している。「新日本古典文学大系」の『後拾遺和歌集』は、「見るにつけ鏡に映るわが面影がつかいなあ。私がこのように美しくなかつたならば、このような運命にあつたであろうか」と解している。下句の解釈はそれぞれ異なるが、上句については概ね俊頼の「わろからましかば」に近い意にとられている。

それに対して、「和泉古典叢書」において川村晃生氏は、この歌は『和漢朗詠集』の「王昭君」に載る白楽天の詩に「愁苦辛勤憔悴し尽くし 如今却つて画図の中に似る(注)」とあるのに拠るとし、胡国で容色の衰えた王昭君の嘆きを詠んだものととらえる。

見る都度鏡の我が姿が堪え難いよ、こんな所に来なければこうはならなかつたろうに。

これは、『八代集抄』が紹介する「両説」のうちの第二案である。『文華秀麗集』所収の嵯峨天皇の詩にも「沙漠は蟬鬢を壊り 風霜は玉顔を残ふ」の句があり、王昭君の容貌の衰えは平安朝の漢詩においても詠まれている。

田中幹子「漢詩・朗詠の伝承と王昭君説話——「みるからに鏡の影のつらきかな」歌の背景と変遷」は川村氏の立場を受けつつ、先に挙げた小野末嗣詩の別の二節、「料り識る腰圍の昔日より損ずるを 何ぞ毎に鏡中に向つて看るを勞せむ」における鏡の要素も分析した上で、王昭君が絵に醜く描かれたことを「かからましやは」ではなく「かからざりせば」の「かから」が指すものと解し、下句を以下のように通釈する。

今鏡に映し出されている醜い姿とそっくりな絵姿にある時描かれなかつたならば、偽りの絵姿と同じこの様な姿になつただろうか、いや決してならなかつただろう（私は美しいままでいられたのに）。

三村友希「鏡の中の大君——結ばれぬ理由と王昭君伝承

——」も『源氏物語』における「鏡」の分析の中で田中氏の解釈を引き、「自分の容貌の衰えを「見る」女主人公」としてこの歌の王昭君を位置づける。

私も、ここで鏡に映る王昭君の姿は、詩での詠まれ方を引き継いだものと解した上で、三村氏が着目するように、この歌に「鏡」が詠み込まれていることの意味は大きいと考える。上句の「みるたびにかがみのかげのつらきかな」は、王昭君の美醜のみならず、それが「鏡に映った」姿であることも伝えていっている。かつて美しく映した鏡は、今はその姿を「みるたびに」醜く、そして正しく映し出す。

詩の影響に関して、上述した大江朝綱の詩を思い起こしたい。

胡角一声霜の後の夢 漢宮万里月の前の腸

昭君若し黄金の賂を贈らば 定めて是れ身を終ふるま  
で帝王に奉ぜん

この詩について、先に紹介した『和漢朗詠抄注（永済注）』は以下のように訓み、注している。

照君若し黄金の賂を贈らましかば 定て是れ身を終ふ

まで帝王にぞ奉<sup>つかま</sup>らまし

意ハ、照君モ、金ヲモテ、画工ニマヒナヒヲクアラマシ  
カハ、ミ、ヲハルマテ、キミニソ、ツカヘタテマツラマ  
シ。カ、ルウキメヲハ、ミサラマシト云也。

懷円の頃の訓みは定かでないが、いずれにしてもこの詩の  
反実仮想は、王昭君説話の最も基本的な枠組みをとらえたも  
のと言える。歌の下句「かからざりせばかからましやは」は、  
源氏も口ずさんだこの詩の枠組みをふまえたものではなから  
うか。「かからざりせば」と「照君若し黄金の賂を贈らましか  
ば」、「かからましやは」と「定て是れ身を終ふまで帝王にぞ  
奉らまし」がそれぞれ対応すると考えれば、二つの「かから  
ましが指し示すのは反実仮想を反転させた事態、すなわち、王昭  
君が賂を贈らなかつたこと、そしてそれゆえに胡国へ遣ら  
れる憂き目に遭うことである。試みに、以下のように解して  
おく。

見るにつけ鏡に映るわが身の衰えた面影が辛いことよ。  
自分の美しさを恃んで賂を拒んだりしなければ、胡国  
に遣られこのような姿になるはずはなかつたのに。

## 六

自分を恃むということは、その姿を正しく映すはずの「鏡」  
を信じることもあった。そのような「鏡」の役割をより積  
極的に取り入れた王昭君説話が『唐物語』の二十五段である。

むかし漢の文帝と申御かどおはしましけり。三千人の女  
御きさきのなかに王昭君ときこゆるひとなん、はなやか  
なる事はだれにもすぐれ給へりけるを、「この人みかどに  
まぢかくむつれつかうまつらば、我らさだめて物のかず  
ならじ」と、あまたの御こ、ろにいやましくおほしけり。  
この時にえびすの王なりけるものまいりて申さく、「三千  
人までさぶらひあひ給へる女御きさき、いづれにてもひ  
とりたまはらん」と申に、うへみづから御覧じつくさん  
事もわづらひ有ければ、そのかたちを糸にかきて見給に、  
人のをしへにやありけん、この王昭君のかたちをなんみ  
にくきさまになむうつしたりければ、……<sup>(註)</sup>

『唐物語』の特徴として、今日伝わる王昭君説話の要と言え  
る賂の話が出てこない。「えびすの王」に嫁ぐことになった

理由は「人のをしへにやありけん」、すなわち絵師に対する何者かの教唆と記されている。冒頭近くには、王昭君の群を抜いた美しさに周りの「女御ささき」達が「あまたの御こゝろにいやましく（厭わしく）おぼしけり」とあるから、その仕業であろう。絵師が醜く描いたのは嫉妬が原因である。この文章全体にわたって、『源氏物語』桐壺巻における桐壺更衣への嫌がらせを思わせるものがあり、桐壺巻を下敷きにしていてと考えてよいであろう。<sup>(注2)</sup>

物語には続けて王昭君の歌が記されている。

うき世ぞとかつはしるくはかなくもかゞみのかげをたのみけるかな

とあって、「この人はかゞみのかげのくもりなきをのみたのみて、ひとの心のごれるをしらず」という評で話が結ばれる。ここにも諸書に見られた「たのみて」の語があつて、語り方の定型をふまえる。「かゞみのかげのくもりなきをのみたのみて」とは、鏡が真実の姿をありのままに映し出すことを持んだのであり、それゆえに鏡に映る美しい自らの姿を持つんだのである。王昭君は「ひとの心のごれる」こと、すなわち不正に醜く描いたりそれを教唆するようなことを疑わなかった。

だが、絵師の描いた王昭君の姿は、曇りのない鏡が映し出す像とは程遠い、偽りで歪められたものだった。そこには、「鏡」真、絵「偽」の関係が織り込まれている。この対応関係は後に、『夫木和歌抄』雑部十七の、

王昭君といふことを

権僧正公朝<sup>きんわうせい</sup>

しらざりき鏡の影をたのみてもうつしかへける筆の跡<sup>(注2)</sup>まで

という歌にも詠み込まれている。

また、この歌で示されるのは先の懷円の歌と同様に王昭君の述懐であり、残された元帝の心情を察する『今昔物語集』や『源氏物語』とは一線を画す。『唐物語』所収の説話は一貫して王昭君の物語であり、いわば烈女伝の構成である。王昭君を得た「えびすの王」の喜びは語られるが、残された元帝の描写はない。詩歌に詠まれてきた鏡がこの歌を通して説話の中に組み入れられることで、真実の人としての王昭君像が切り開かれる。「恃む」対象が自らの美しさそのものから「かゞみのかげのくもりなきをのみ」へと変化したことは示唆的である。

「自恃容貌」の王昭君像の裾野は広く、『前太平記』（元禄初

年頃刊)の巻第三「将門奢侈事 付王昭君事」には「我が姿の勝れたるをや憑まれけん、彼の画工に少しも賂し給はず」という一節があり、『傾城王昭君』(元禄十四(一七〇一)年初演)にも、「其のかみ唐土の王昭君、すでに胡国へ捕はれしも、我が麗はしき形を頼み、画工に事をつくるはねば、画姿故に胡の国へ赴きたりし物語」とある。

一方の、「かゞみのかけのくもりなきをのみたのみて」(『唐物語』)という王昭君像の追跡はまだ十分に果たせていないが、謡曲「昭君」の末尾にも「曇らぬ人の心こそ、まことを映す鏡なれ」とあり、『唐物語』に通じる一節が含まれる。鏡を恃むことは、そこに映る自らの美しさをも恃むことと実は根底で重なっており、鏡のモチーフは「自恃容貌」の王昭君像に「曇らぬ人の心」という美徳を加えた。王昭君説話にこうした役割での鏡が登場することは少ない中、その美徳が後の「昭君は、極めて正直な精神を持つて居たので」(『東西名婦の面影 金言対照』)といった教科書的な王昭君理解にどのような接続しているのかについては、稿を改めて考えたい。

注

注1 岩波文庫による。

注2 『金沢大学法文学部論集』十一、一九六四年三月。

注3 有精堂出版、一九九四年。

注4 国立国会図書館デジタルコレクションによる。

注5 新日本古典文学大系による。

注6 和歌文学大系の訓読による。

注7 群書類従(巻第二百二十五、文筆部四)による。

注8 山口一樹『うつほ物語』俊蔭女の尚侍就任と王昭君説話・長恨歌・竹取物語』『東京大学国文学論集』第十四号、二〇一九年三月。

注9 新編日本古典文学全集による。「胡笳」の調べについては、上原作和・正道寺康子企画編集『平安文学と琴曲——余明王昭君を奏でる』(DVD)に、余明氏による演奏が収められている。

注10 新編日本古典文学全集による。論考として、小林健二「昭君」攷』(『国文学研究資料館紀要』第七号、一九八一年三月)がある。

注11 福井重雅『訳注西京雜記・独断』(東方書店、二〇〇〇年)。諸本については、西野貞治『西京雜記の伝本について』(『人文研究』三一七、一九五二年七月)を参照。

注12 中津濱渉『楽府詩集の研究』(汲古書院、一九七〇年)所収の文学古籍刊行社本(北京図書館蔵宋刊本)による。

注13 国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」による。新釈漢文大系の訓読による。

注14 山崎誠「類林」追考——中世史漢物語の源流——『国文学研究資料館紀要』十七、一九九一年三月、李育娟「類林」の再編について——「王昭君伝承」を糸口に——『詞林』六十五、二〇一九年四月。

注15 王三慶『敦煌類書』上、麗文文化事業股份有限公司、一九九三年。

注16

注17

注18

注19

注20

注21

注22

注23

注24

注25

注26

注27

注28

注29

注30

注31

注 17 柳瀬喜代志・矢作武『瑠玉集注釈』（汲古書院、一九八五年）による。

注 18 新編日本古典文学全集による。

注 19 『和漢朗詠集古注釈集成』（第三巻、大学堂書店、一九八九年）による。

注 20 新日本古典文学大系による。

注 21 「平安朝における王昭君説話の展開」『成城国文学』十一、一九五五年三月。

注 22 『白楽天詩選上』（岩波文庫）による。

注 23 日本古典文学大系による。

注 24 嵯峨天皇の王昭君詩については、竹村則行「平安・嵯峨帝の

「王昭君」詩と藤原佐世の『日本国見在書目録』（九州中国学会報）五十七、二〇一九年五月）に詳しい。

注 25 『韻文学（歌）の世界』（講座日本の伝承文学）一九九五年六月。

注 26 『源氏物語のことばと身体』青簡舎、二〇一〇年十二月。

注 27 講談社学術文庫による。

注 28 小林保治編『唐物語全釈』（笠間書院、一九九八年）に、「桐壺更衣の姿とも重なってくるように思われる」（岩山泰三）と指摘がある。

注 29 新編国歌大観により、表記を一部改めた。

注 30 叢書江戸文庫による。

注 31 近代日本文学大系による。

注 32 近世期の事例として、飯倉洋一氏は、『新斎夜語』において北野天満宮の社僧が、本稿にも挙げた『和漢朗詠集』所収詩について「昭君もし黄金の賂を贈りなば 定て是身を終るまで君王に奉るのみならん」と独自の訓みを披露し、「賂を贈らねはこ

そ、かく末代に美名をのこしつれとの意をふくませて、昭君か潔白を賛し給へるなるを」と講釈することを指摘している（王昭君詩と大石良雄——『新斎夜語』第一話の「名利」説をめぐって）『語文』一〇五、二〇一六年十二月）。

（付記）本稿は、科学研究費基盤研究（A）「東アジア古典学の次世代拠点形成——国際連携による研究と教育の加速」（研究代表者齋藤希史）による研究成果の一部であり、二〇一八年三月十二日に浙江工商大学で行われたセミナー「漢籍と日本」における口頭発表「王昭君説話の語り方」を基に加筆した。

（たむら たかし・東京大学准教授）